



Title	古代ローマの農事書における「健康的な場所」
Author(s)	堤, 亮介
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2016, 50, p. 29-61
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/70031">https://hdl.handle.net/11094/70031</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 古代ローマの農事書における「健康的な場所」

堤 亮 介

キーワード：古代ローマ／農事書／「健康的な場所」／環境論

## 1. はじめに<sup>1)</sup>

### 1.1. 問題の所在

本稿の目的は、古代ローマの農事書における環境思想を検討し、それらの著作で「健康」がどのように扱われているかを検討することを通して、ローマの医学的知識の内には環境に関する「ヒポクラテース的伝統」とは違った系譜が見られることを明らかにする。

ローマの農事書には、前2世紀の大カトー、前1世紀のウァッロー、後2世紀のコルメッラのものが現存する<sup>2)</sup>。これらの著作は共和政期から帝政前期にかけての農業のありかたを研究するうえでの重要な文献史料である。彼らの語る農業実践は大プリニウス『博物誌』や考古学的な史料と並ぶ貴重な史料であり、各著作が書かれた年代には隔たりがあるものの、ローマの農業経営、土地所有の歴史的变化を反映する証言とみなされる<sup>3)</sup>。彼らの記述が現実を示すものかそれとも理想としての農業を叙述したものかもまた議論の対象となり、ローマにおける農業経営の全体に敷衍すべきではないことは現在認められているところであるが<sup>4)</sup>、それでもローマの農業経営を検討する上で3者の農事書は必要不可欠な史料である。

また農事書はローマ農業の実態を示す史料であると同時に、ローマの知識人が著した学術テキストの一種類としても読むことができる。というのも、農事書は実務的なマニュアルに留まらず、農業に関わりのあるさまざまな知

識を編成し纏めたものであるからである。そしてその中には、本論の主題となる健康に関する知識も含まれている。それゆえ農事書は、3人の著者がいずれも狭義での医学専門家ではないとはいえ、ローマの医療を理解する上でも極めて重要な史料として扱われる<sup>5)</sup>。そうした知識は農事書が想定し養わんとする家長とその妻が、家族や奴隷、家畜の健康を維持するために必要なものとされているのである<sup>6)</sup>。

このような医学史研究において注目される要素のひとつに、ウィッラ<sup>7)</sup>を建設するべき「健康的な場所 (*locus saluber*)」に関する記述が存在する。3つの農事書のいずれもが、農業の出発点として農地あるいはウィッラを購入・設置するのに相応しい場所について論じており、そこでは健康という要素が土地の肥沃さや交通の便などと並んで挙げられている。本稿が注目するこの「健康的な場所」にまつわる思想は様々な文脈で論じられてきた。例えば医学史家 Scarborough は、水道や排水溝などのローマの様々なインフラストラクチャーや、それによる公衆衛生的効用の背景にある思想として扱う<sup>8)</sup>。また Nutton はガレノスの「病気の種子」概念を精査した論文において、ヴァッローやコルメッラに、留保付きではあるものの、「病気の種子」概念に先行する記述を見いだす<sup>9)</sup>。また思想的系譜を辿る研究においてこうした記述は、ローマの農業的伝統に根差したものであるとされる<sup>10)</sup>。一方で、前2世紀以降にヘレニズム世界から流入してきたギリシア医学の流れに属すると解釈されることも多い。周知のとおり、後代の医学に多大なる影響を与えたヒッポクラテースの名を冠する諸著作<sup>11)</sup>には、上で挙げたような環境論的な議論が少なからず含まれている。沼とそこから発生する瘴気(ミアズマ)、気候によって決定される体質や疾病、健康的な水とそうでない水——こうした問題意識を『ヒッポクラテース全集』の著者たちとローマの農学的テキストの著者たちは共有しており、ゆえに後者は環境に関する「ヒッポクラテース的伝統 (*Hippocratic tradition*)」の下にある、とされる<sup>12)</sup>。

もちろんこの「伝統」は便宜的な呼称に過ぎない。ギリシア・ローマの別無く、古代の医学は単一の人名で括ることが不可能な多様性に満ちたもので

ある。とはいえ、こうした農事書の環境論的記述については、その理論的な系譜をたどり、彼らの議論の出典がどこにあるのか——『ヒポクラテース全集』かあるいは別の思想家か——に焦点を当てた研究が多く、その特殊性なりテキストの性質と合わせて論じられた研究は、管見の限りではわずかである。<sup>13)</sup>

本研究は諸農事書における環境についての記述が、「ヒポクラテース的伝統」にどのような点で属し、またどの点ではそうではないのかを明確化させることを目的の一つとする。その差異は、単にこれらのテキストの独自性を示すだけでなく、健康が医学とは別の領域でどのように扱われていたのかを理解する上で重要なものになるだろう。結論を先取りして言えば、医学的テキストにおいては環境が病気の原因と治療法を知るためのものである一方で、少なくともウァッローとコルメッラにおいては、既に与えられた環境にして人間は如何に対応すべきか、という問題意識が存在している点にある。こうした差異を示すことによって、医者とそれ以外の人々の、健康に関する問題意識の違いも明らかにすることができるだろう。

## 1.2. 「ヒポクラテース伝統」における環境と病気

本論に入る前に、議論の前提となる「ヒポクラテース的伝統」について簡単に確認しておこう。『ヒポクラテース全集』に含まれる諸々の著作群には、環境と病気について論じるものが幾つも存在する。例としては『流行病』『体液について』『体内風気について』などが挙げられるが、以下では環境論そのものが主題とされている『空気、水、場所について』<sup>14)</sup>を確認する。

『全集』に含まれる他の著作と同様、『空気、水、場所について』は前4世紀ごろの作品である。本作は大きく分けて2つの部分で構成されている。前半では身体と気候風土の連関についての一般的な考察が記されており、後半ではギリシア、アジア各地の気候とそこに住む人々がどのような特徴を持っているかについての記述となっている。本書において取り上げられる気候風

土とは、題目の通り空気と水であり、これらが持つさまざまな性質がどのような病気を引き起こすのか、そしてこれらを決定する気候をどのように読み取るべきなのかが主題となる。

都市の健康性が論じられるとき、まず記述されるのは空気の特徴である (Hipp., *De Aer.*, 3-6)。本書では風向きによって四種類の都市が分類される。大気の性質とそこに住まう人々の健康状態は対応関係にあり、寒冷な北の風にさらされた都市の人々と、温暖な南風を受ける住民とでは、身体も正反対の特徴と症例を示す。もっとも健康に良いとされるのは東風に面した都市であり、気温においても水質においても好ましく、住人は身体的にも精神的にも健全である。一方、西からの風に面し東からの風から遮られているような都市はもっとも病気にかかりやすい都市であるとされる。

第二の要素が飲用水である (*ibid.*, 7-9)。水は病気を引き起こす健康に悪いもの、逆に健康的なものとの二つに大別される。不健康な水として真っ先に挙げられるのは沼地の水であり、これは夏には悪臭を放ち<sup>15)</sup>胆汁の分泌を促すうえ、冬にもまた混濁し喉に悪影響を与える。それとは反対に、健康に良い水の例として取り上げられるのは高地や丘陵地からの水であり、これらは美味で澄んでおり、冬には温かく夏には冷たいとされる。このような湧き水の中でも東に向かって流れるものは最上で、次点で北からの水が健康に良い。また雨水はもっとも腐敗しやすい一方で、それ自体としてはもっとも軽く甘いとされる。

『空気、水、場所について』において、水と大気はさまざまな病気と関連し、住民の体質を決定する要素として記述される。その二大要素は天候の変化だけでなく、その住民が住まう場所に強く依存し、医者はそれを理解することで適当な診断や治療を行うことができるとされる。それは、

というのも、医者が、できればそれら（環境の影響）すべてを、全部とは言わないまでも大部分のことをよく知っているなら、未知の町に来たときも、土地特有の病気とどの土地にも共通な病気との見分けに無知で

あることはなく、病気の治療において途方に暮れることも失敗することもないからである (*ibid.*, 2)。

といった、著者自身による『空気、水、場所について』の趣旨にある通りである。このような思想は『水について』に限定されたものではなく、理論的なあるいは記述的なさまざまな著作の中で度々展開されている。

注意すべきは、このような病気の原因としての環境を取り扱うテキストにおいては、「病因の理解」の前提に「治療」という目的があった、という点である。都市の住民集団を襲う同一の病、その原因を自然環境にも求めようとする試みは見られるが、それは病気の原因を抑制するためではなく、患者個人を治療するのに役立つためのものであった。<sup>16)</sup> その点において、「ヒッポクラテスの伝統」における環境は所与のものであって変更や対策が効くようなものではなく、対応としては余所に待避することや適切に治療を行うことなどが主なものとなるのである。

翻って農事書ではどうなのか。医者ならぬ富裕な市民の手による著作においては、健康と環境との関係、それについての議論は医学書と同じまなのか、そうでないのか。以下各章で、大カトー、ウァッロー、コルメッラの農事書を検討する。

## 2. 大カトーの『農業論』

ローマで最初の農事書の著者であり、大カトーまたは監察官カトーと呼ばれるマルクス・ポルキウス・カトーの経歴は次の通りである。前 234 年、<sup>17)</sup> ローマ南東の都市トゥスクルムに出生した彼は、サビーニで青年期を過ごしたのち、前 218 年に始まった第二次ポエニ戦争に従軍することになるが、そこで得たりキニウス・ウァレリウス・フラックスとの縁故により、ローマでの政治的キャリアを積み始める。祖先に公職経験者を持たない「新人 (*homo novus*)」であったカトーだが、前 204 年にクァエストル職<sup>18)</sup> に就任したの

を皮切りに、198年にプラエトル職<sup>19)</sup>、195年にはコンスル職に就いた。この間、ローマはポエニ戦争に続く対外戦争を重ねていたが、カトーもこれらの戦争に従軍し、コンスル職としてはスペインで指揮を執った。

スペインからローマへ帰還した後、20年ほどの間を置いて、彼は後に添え名にもなるケンソル職に、盟友であるウァレリウス・フラックスを同僚として就任する。ケンソル職はローマの官職階梯の最上位にあたる地位であり、またその任務の一つがローマの綱紀肅正であったこともあって、新人であるカトーがそれに就任することへの批判があったものの、カトーは同僚と協調しつつも主導的に、精力的かつ厳格に職務を遂行したとされる<sup>20)</sup>。

カトーの著述作品は弁論、未刊行著作、長男への書簡、歴史や学術的文章など多岐に渡っていたが、その多くは散逸したか断片の形でのみ現代に遺され、『農業論 *De Agri Cultura*』のみが全体を把握できる唯一の書物である。文筆活動におけるカトーの特筆すべき点は、彼が散文のラテン語で歴史や学問について書き残した最初の人物であるということにある。『農業論』もまたそうした作品の一つとして、全文がラテン語散文によって書かれており、農業を主題とした散文学としてもローマで最初の作品となる<sup>21)</sup>。執筆年代を正確に特定することは困難であるが、カトー自身の著述に従えば少なくとも彼が36歳を越えてからの作品であろう<sup>22)</sup>。

大カトーの農業論を医学史的に読み解く場合にもっとも注目されてきたのは、本書の70章以降で論述されるレシピ集、特に薬や薬草に関する記述である<sup>23)</sup>。例えばワインは様々な仕方で薬としてももちいられ、古いワインとザクロ、フェネルを混ぜた薬は消化不良 (*dyspepsia*) や排尿困難 (*stranguria*) に効果があるとされる<sup>24)</sup>。他、下剤の処方箋<sup>25)</sup>、脱臼に対する呪文を用いた治療法<sup>26)</sup>などが言及される。大カトーによるキャベツ礼賛は有名だが、あらゆる植物の中で最上の地位を与えられているキャベツは食べ物としてのみならずその薬効の観点からも称賛され、経口摂取や湿布などにより疾病を治療できるものだとされる<sup>27)</sup>。

一方、大カトーの『農業論』には「健康的な土地を選ぶこと」というテー

マも確認することができる。本書の第1章でカトーは、農業を行ううえで最初に心がけるべき事柄として農地の購入について論じる。近隣の状態や天候のよさ<sup>28)</sup>に気を配るよう忠告した後、カトーは次のように続ける。

可能であれば、(農地は)南に向いた山の麓、健康的な場所にあるべきであり、労働力に富み、水源があって、栄えている町か海、船が渡る川、あるいは人通りの多い良い道が近くにあるべきである (Cato, *Agr.*, 1.3)<sup>29)</sup>。

先に触れたように、ヒッポクラテースの医学においては、風向きと都市の健康性とは深い関わりがあるものとして理解されてきた。また、「医学」とは別の領域に於いて、理想的な場所に風向きと健康性の概念を導入した著作として、アリストテレスの『政治学』を挙げることができる。

第一に不可欠なこととして健康に関することがある。すなわち東に向かって傾斜しており、東から吹いてくる風を受けるのが都市にとっていっそう健康的である。つぎには北風の風下にあること。冬にしのぎやすいからである (Arist., *Pol.*, 7.1330a34-41)<sup>30)</sup>。

「健康的な所に健康的な方角にうまく場所を占めていること」、これは『政治学』において、住民の健康に意を払う上で、水と並んでもっとも重要な点であるとされる。

大カトーの薬学的記述がその論述スタイル、語彙をギリシア語から摂取している以上、同様のことが土地に関しても言えるかも知れない。とはいえ、カトーの『農業論』に対するギリシアの影響の度合いは議論の余地があり、また大カトーが論じている事柄は極めて一般的なものでもある。そのため上の記述に関しても、ヒッポクラテースを含む思想家からの直接的な影響については保留しておきたい。

いずれにせよ重要なのは、ローマ最初の農事書であるカトの著作において既に、家族や家畜の健康が家長の管轄下にあるものとみなされていることである。<sup>31)</sup> この点は第1章、理想的な農地についての記述についても妥当する。健康性と風、水の関係というテーマは他の農事書でも繰り返し、より詳細に、あるいはよりしっかりと結びつけられて論じられることになる。次の章では、前1世紀の著述家ワッローの『農業論』を検討するが、そこでは知による自然環境への対応がより明確な形で記述されることになる。

### 3. ワッローの『農業論』

前1世紀のローマにおける最大の知識人の一人であったマルクス・テレンティウス・ワッローの、その膨大な著作で現存しているものは、『農業論 (De Re Rustica)』を除けば僅かに『ラテン語について (De Lingua Latina)』の一部を含む断片のみである。

大カトからワッローまでの100年、農業を扱ったラテン語の著作は当然存在していた。サセルナ父子が農業についてのテキストを残したことはコルメッラや大プリニウスなどに証言され、<sup>32)</sup> 後述のスクローファもまた農業の権威者としてなんらかの作品を著したと推定される。その中で最も大きな影響力を持っていたのはラテン語に翻訳されたカルタゴのマゴによる農事書である。<sup>33)</sup>

ワッローの『農業論』がローマ医学史研究で非常に大きな注目を受けたのは、彼が細菌説を予言するがごとき記述を行っているからである。体内に侵入し病気を引き起こすとされる「ある種の小さな生き物 (*animalia quaedam minuta*)」、これはいわゆるヒッポクラテース的伝統の枠には収まりきらない概念であり、それがワッローの天才によるものか、あるいは何らかの典拠が存在していたのか、また後代の著述家(とりわけコルメッラ)に継承されなかったのは何故なのかなど、多くの議論が存在している。最近の研究ではルクレティウスあるいは彼が基づく原子論の誤読を含む解釈に依

るものだとされており、<sup>34)</sup>彼の記述が単に「ヒポクラテース的伝統」に含めきれないことはそうした点からも窺うことができるだろう。

そして同様に、彼の非-ヒポクラテース的な側面は、病因としての「小さな生物」だけでなく、その他の点からも読み取ることができる。以下では上述の箇所を含めた、ウァッローの環境病因論を検討する。

### 3.1. ウァッローと『農業論』の構成

まずは簡単に、ウァッローとその著作に関する情報を整理しよう。

ウァッローは前116年、サビーニ地方のレアテで、おそらく騎士身分の家に出生した。彼の政治的キャリアはポンペイウスの庇護の下で積み重ねられ、カエサルがポンペイウスに勝利した後はその寛恕を受けて大図書館の監督を任されることとなる。カエサル没後、第二次三頭政治の時代にはオクタウィアヌスの保護に入り、以降はもっぱら執筆活動に従事することとなる。

彼の著作『農業論』が執筆されたのは彼が80歳を超えたころ、すなわち前37年ごろであるとされる。<sup>35)</sup>土地と耕作に充てられた第1巻は妻であるフンダニアに捧げられ、大型の家畜を対象とする第2巻と野禽について論じた第3巻は友人を宛先として執筆されている。本書は大カトーのそれを引き継ぎつつより体系化された構成をとっており、また分野の細分化と明確化も厳格に行われ、序文を除けば対話編形式で執筆されている。

第1巻の筋立ては以下の通りである。セメンティウァ祭（播種祭）<sup>36)</sup>で義父（つまりフンダニアの父）であるガイウス・フンダニウス、ガイウス・アグリウス、プブリウス・アグラシウスと出会ったウァッローは、アグラシウスの「良い土地」に関する質問を口火として議論を開始する。アグリウスはエラトステネスを引き合いに出しながら、イタリアはアジアよりも健全な土地であって、かつ最も健全な土地は同時に最も肥沃であると主張するが、フンダニウスは土地ごとの環境の差異を示しつつ、健康性と肥沃さは別個であって、その一方も欠いてはならぬと反論する。そこでフンダニウスは彼らより農業に詳しい2人の人物、ガイウス・リキニウス・ストローとグナエ

ウス・テレメリウス・スクローファ<sup>37)</sup>を見つけ、彼らを議論に誘う。スクローファが提示した農業論のカテゴリー分けを経た後、本来の議題でもあった良い土地についての議論によって本論が始まる。<sup>38)</sup>

相応しい土地を選ぶことについての叙述が第一に与えられる点、そして健康性が問題となる点においては、ウァッローの農業論はカトーのそれと同様であるが、カトーと異なるのは、ウァッローがそうした記述を行う理由を説明している点である。

### 3.2. 病的な土地と知識の役割

農業の2つの目標である利益 (*utilitas*) と楽しみ (*voluptas*)、後者に対する前者の優位を論じたのち、スクローファは次のように語る。

また、より健康的な農地は、収穫が安定するためより有用である。一方、反対に病的な場所では、たとえ肥沃な農地であっても、わざわざ (*calamitas*) の為に農家は収穫を得られない。というのもオルクスの下にある場所においては、収穫だけでなく農民の生命さえも確かではないからだ。しかるに健康性を欠いた場所では、農業は家と家産を賭けとするサイコロ遊びに他ならない (Varro, *Rust.*, 1.4.3)<sup>39)</sup>。

スクローファの口を借りてはいるが、ここでウァッローは土地の健康性 (*salubritas*) と肥沃さとは別のものであって、かつ農民の生死に関わる事柄であると論じている。正確に言えば、ウァッローの理解では健康的な土地と対比される「病的な (*pestilenti*)」な土地が存在し、そこでは農民は死の危険性に晒されているのである。

さらに興味深いのは次の節である。

知識はこうした事柄を和らげる。というのも、この健康性は大気や土地に由来し、我々の力ではなく自然の力のうちにあるのだが、それで

もやはり多くの部分が我々の側にも存するのであって、勤勉によってそうした重荷を軽くすることができるのである。もしもその土壤が、大気や水が原因で、そこで悪臭を発生病的なものとなっている場合、あるいは天候の方位が原因で農地が暑くなりすぎている場合や、空気が良くない場合、これらの欠点は家長の知識や出費によって正されるのであるが、その際にはウィツラがどこに設置されたか、どの程度の大きさか、柱廊や扉、窓がどちらを向いているのかが、非常に重要となる (*Ibid.*, 1.4.4)<sup>40)</sup>。

この節からは2つのことを読み取ることができる。第一に、ウァッローにおいても、ある土地の（「健康性 (*salubritas*)」）を決定する要素が水や空気であり、またこれらのものが地勢や天候次第で、とりわけ夏の暑さによって悪臭を放ち「病的 (*pestilentior*)」になるということである。こうした見解は『体液について』において見られる瘴気説的理解と近接したものである。そして第二に、いっそう興味深いこととして、こうした環境によって決定されるはずの「健康性」が「知 (*scientia*)」や「勤勉 (*diligentia*)」、あるいは「出費 (*sumptum*)」によって改良可能であるという理解である。そしてそれは健康的な土地を選択するという、最初の1回の行為にとどまるものではない。ウィツラの大きさ、内部の構造物がどの方角に向かって開かれているかといった建築学的諸要素もまた、「健康性」に影響を与えるのである。

ウァッローは——スクローファの言葉を借りて——知によって人が救われた2つの例を挙げる。

かの医者ヒッポクラテースはひどい疫病の際、ひとつの農地だけでなく多くの町を知によって救ったのではあるまいか？ いやしかし、どうして私は彼を引き合いに出したのだろうか？ ここにいるわれらが友人ウァッローは、兵士たちと艦隊がコルキュラにあって、すべての家が病と死と

に満たされていたそのときに、新しく開けた窓から北風を導いて、病的な風を防ぎ、扉の配置を換えて、その他こうした種類の事柄を注意深く行い、彼の仲間や奴隷を回復させたのではなかったか？ (*Ibid.*, 1.4.5)<sup>41)</sup>

ヒポクラテースが一体何をおこない、それが先の文脈といかなる連関を持つのかは不明瞭であるが、<sup>42)</sup> ウァッローが用いたとされる「知」は彼自身の業績から伺うことができる。すなわち、風向きを制御することで健康的な風を病人に与え、不健全な大気を屋内から排除すること。<sup>43)</sup> 言うまでもなくウァッローは、例えばヒポクラテースのように、専門的な医療教育を受けた医者ではなく、またここでもそうした実践を見ることは出来ない。しかしウァッローはその代り、軍隊の流入により不健全になった都市において、その環境に対策を建てることで家人の世話を果たすのである。<sup>44)</sup>

このようにして、ウァッローの思想、あるいは彼の『農業論』というテキストの独特な問題意識が現れる。すなわち、避けたい害悪な自然環境を人間の知識によって克服しようとする発想である。病気を引き起こす環境自体は先述したとおり医学における重要なテーマの一つであったが、そこで重視されていたのは病気の傾向性を明らかにして治療の方策を定めることであって、ウァッローの言に見られるような環境に対策を講じる事ではなかったのである。こうした環境への対策は、著名な第1巻12章でも再び論じられることになる。

第12章でウァッローは、ウィッラに相応しい土地、とくにその健康性についてより詳細に論じている。彼によれば、ウィッラが建てられるべきなのは「山の麓、広い牧草地がある場所、その地域に吹いてくる健全な風に向き合った場所」であり、また「春分／秋分に日が昇る方角 = (東)」を向いていることが最も望ましい。また、川が近くにある場合は、そちらから風が入り込まないように注意すべきであるが、それは「冬には冷たい風が荒々しく吹きすさび、夏には健康的でないから」である。

続く第2節は沼地と「小さな生き物」に関する論述である。

沼のある土地がある場合はそちらを避けるべきである。それは先述したのと同じ理由からでもあるし、また目に見えないほど小さく、空気に混ざって口と鼻から体に侵入し、難病を引き起こすある種の生き物が発生するからである」。フンダニウスは問うた、「もしそういう土地が私に相続されることになったら、私は疫病が起こらぬよう何ができるのだろうか」「そんなこと、私にだって答えられますよ」アグリウスが言う、「売るのです、できるだけ高値で。それが無理なら放棄することです」(*Ibid.*, 1.12.2)<sup>45)</sup>

病気の原因としての沼地はさまざまな文脈で論じられてきた。『ヒポクラテス全集』では沼と病気の関係がたびたび論じられ、<sup>46)</sup> また医学的テキストの外では、ウィトルーウィウスが『建築書』で沼からの瘴気の危険性を指摘し、<sup>47)</sup> また逆説的ながらストラボンが、ラウエンナの沼に近接するにも関わらず健康的な気候を取り上げる<sup>48)</sup> など、沼の近隣は不健全な土地の代表例とさえ呼べるものである。<sup>49)</sup> その中でもウァッローの記述の特筆すべき点は、その原因をある種の生物だとしていることである。

それゆえ、第12章の最も興味深い点が第2節「小さなある種の生き物」であることは疑いない。しかし同時に、第3節の病的な土地への対応もまた、医学史上注目すべき箇所であろう。<sup>50)</sup> 先の節において沼のある所領が相続された場合の処理についてフンダニウスは尋ね、それにたいしてアグリウスは売却するか放棄するか、という消極的な解決策を提示するのであるが、それに対してスクローファは次のような代替案を提示する。

しかしスクローファは次のように言った。「ウィツラが、不健全な大気が吹いてくる方を向いていないように、また谷間にはなくむしろ高い場所に建設しなさい。というのも何か悪いものが入ってきたときに、容易に分散されるから。さらに、そこが太陽によって一日中照らされているならばより健康的である。小さな生き物どもは、そこで発生しようと

外から入ってこようと、吹き飛ばされるか乾燥によってすぐに死んでしまふから」(Ibid., 12.2)<sup>51)</sup>

この箇所を Jarcho は3つの論点から整理する。第一に日光が健康的なものであるという理解、第二に「小さな生き物」が太陽によって殺されうること、第三にこの生き物が風によって吹き飛ばされるようなものであること、である。<sup>52)</sup> しかしながら本稿にとって重要なのは、ワットローが自分の衛生観と「生き物」の特徴をこのように付け加えつつ、同時に第二節で提示された「不健康な土地にどう対処すべきか」という問題に対して、「放棄」以外の選択肢を提示している点にある。もちろん、ワットロー（あるいはスクローファ）でさえ、沼そのものを排除したり、小さな生き物の侵攻を防ぐといった根本的な対策を提示することはできない。しかし彼は、彼の考える生物の諸特徴を利用して、可能な限り害を減らし得るように生活空間を配置するという仕方、不健全な土地の利用法を示すのである。

### 3.3. ワットローの『農業論』における環境思想の特徴

ワットローの『農業論』の読解を通じて、医学とは別の文脈における「健康的な土地」理解を読み解く上での手がかりが得られた。すなわち、自然の内に属する土地の健康性と、それを改良し得る人間の学知との関係である。ワットローにおいて病気を引き起こす環境は、基本的には避けるべきもの、別の場所を選ぶべきものであると理解されている一方で、同時に、避けがたい状況下においては人間の知識や技術によって、その被害を最小限にすることができるものなのである。

こうした理解は、通常理解される古代医学の自然観とは別様のものである。都市環境の古代医学的理解について検討した Nutton の研究によれば、古代の理論家たちは、自然環境の人間に対する影響を、適応と不適応を軸として理解しているという。つまり、それ自体としてネガティブな環境が想定されているというよりは、ある環境に人間身体が適合できない場合には病

気が引き起こされ、環境に適応できれば逆に治癒が促進される、といったかたちで、環境は病気になるか健康に影響を与える。このような議論で重要なのは、そのような議論において重要なのは、空気が不健康になる原因ではなく、気候変化に対する患者の身体の抵抗力の方である。<sup>53)</sup> これは、『ヒポクラテース全集』を始めとする医学的テキストにおいてはおおむね妥当するだろう。例えば先述した『空気、水、場所について』では風の性質は体質と結びつき、正反対の風は正反対の体質を作り出すとされ、また水についても序列付けこそなされているが、身体に適合した水、例えば便秘質の人なら軟水、粘液性の人であれば硬水などもまた、健康に役立つものであるとされるのである。<sup>54)</sup>

加えて、『流行病について』、特に第3巻もまた、医学における環境がどのような役割を果たしていたかの理解に役立つ。著者が訪れた都市の臨床記録を中心としたこの著作では、各巻ごとに異なる配列によってではあるが、いずれもある都市の気候についての記述（κατάστασις）が挿入されている。臨床報告の詳細さが目を引く本著作であるが、気候論もそれと同様に、1年を通じた風向きの変化、雨量、季節風などが、同時期に流行した症状と併せて記述されていく。こうした記録に置いて重視されているのは気候や季節、寒暖の変化であり、そしてそれが医学において重要なのは、『空気、水、場所について』と同様に、病気を正確に予知、治療するためだとされるのである。<sup>55)</sup>

ワットローの議論は、上述の医学的著作とは問題関心が異なり、またある意味では議論が単純化されているとさえ言える。彼が気にかけるのは不健全な大気、あるいは「小さな生き物」であり、それがいかなる種類の病気を引き起こし、どのような治療が必要なのかは問われない。そのかわりに重要なのはあらかじめ病気にならないように予防することなのであって、そのために彼は、建築上の様々な工夫や、空調の制御を伝授する。

ワットローの「小さな生き物」がヒポクラテース的伝統の外にあるという点については先述したとおりである。しかしそれは、先行研究で言われて

いるような理論上の差異に留まるものではないだろう。むしろ本稿で強調したいのは、『農業論』というテキストの性質が、テキスト内で提示されている環境への処し方にも影響しているという点である。同じ環境を扱うテキストであっても、ウァッローの『農業書』においては病気の種類や治療行為は問題にはならず、むしろ環境の改善の方が重大な関心事となる。

このような記述の仕方は、さらに時代を下ってコルメッラの『農業論』にも確認することができる。次章では自然の改善という点にも着目しつつ、コルメッラのテキストにおける「健康的な土地」論を検討する。

## 4. コルメッラの『農業論』

### 4.1. コルメッラと『農業論』の構成

ルキウス・ユニウス・コルメッラの個人史の詳細は、実のところ明らかではない。スペインの南端、現在のカディスにあたる植民市ガデスの出身であること<sup>56)</sup>、先の章で取り上げたウァッローの孫世代にあたり、<sup>57)</sup>セネカやケルスス<sup>58)</sup>と同時代に生きたことから、おおむね後1世紀はじめに生きた人物であることは、彼の著した『農業論』から伺うことができる。<sup>59)</sup>

『農業論』の執筆年代はコルメッラの晩年、およそ後65年頃だと推定される。先の2つの農事書よりも遙かに長大なコルメッラの作品は全10巻で構成され、1巻で序論と土地の選定、2巻で土壌、3巻から5巻で商品作物である葡萄やオリーブの栽培、6巻で大型の、7巻で小型の家畜、8巻は魚で9巻では養蜂をそれぞれ主題とし、10巻ではヘクサメトロスを用いて園芸が論じられている。そして11巻と12巻ではそれぞれ、監督者とその妻の義務が語られる。

こうした全体構成の下、コルメッラの『農業論』の本論も土地の購入から議論が始まる。都市から離れているよりは近くに購入すべきであるという主張の後、コルメッラは次のように語る。

しかしもし祈りによって幸運が許したもうなら、我々は健康的な気候、肥沃な土壌、あるところは平地で、またあるところは東か南に穏やかに傾斜した丘を持つ土地を得られることだろう (Columella, *Rust.*, 1.2.3).<sup>60)</sup>

健康性はコルメツラにおいても、農地に要求される要素として、肥沃さなどと並ぶ重要性を有している。こうした事情は、海や川との距離などの農地が備えるべき地勢について列挙された後、さらに次のように説明される。

実際、ポルキウス・カトーは農地を調査する上で特に2つが考慮されるべきであると考えた。すなわち大気の健康性と、場所の生産性である。もしもこれらのどちらかが欠けていて、それでもなおそこに居住しようと欲するのであれば、彼は気が狂っているのであり身元引受人に引き取られるべきである。というのも、正気のひとであれば誰でも、不毛の土壌を耕すために金を費やすなどという事はないし、あるいは逆に、たとえそこが極めて肥沃で肥えていたとしても、不健康な農地からは収穫を得ることはないから。つまりオルクスの下にある土地においては、収穫の獲得も耕す者の生命も疑わしく、また利益よりも死のほうが確実であるから (*Ibid.*, 1.3.1)<sup>61)</sup>

大カトーの名を借りているものの、その内容自体は明らかに、先に検討したウァッローの影響を強く受けていると言って良いだろう。コルメツラもまた、農地が持つ性質を「大気健康性 (*salubritatem caeli*)」と「場所の生産性 (*ubertatem loci*)」の2つに区別したうえで、良い農地にその両者を兼ね備えていることを求める。痩せた土地で農業を行うことは不利益にしかならず、そして農地が健康性を欠く場合、農業に携わる者は死の危険性に曝されていることとなる。この主張は第一次ポエニ戦争時に活躍したマルクス・アティリウス・レグルスの名を借りて繰り返される。

しかし私はなんどでも繰り返されるべき警句を知っているが、それは実際のところ第一次ポエニ戦争の誉れ高い指揮官であったマルクス・アティリウス・レグルスが言ったことと伝えられている。すなわち、最も肥沃な土壌を持つ農地であっても、それが不健康であるならば購入すべきではなく、また非常に健康的な農地であっても、痩せているのであれば購入すべきではない (*Ibid.*, 1.4.2)<sup>62)</sup>。

健康的 (*saluber*) であることと生産的 (*uber, fecundus*) であること、この2つは農地を選定する際に最重要視せねばならぬ事柄である。この点に関してはコルメツラとウァッローは等しい見解を持っていると言えるだろうが、健康性に関して詳細に議論する段になると事情がやや異なる。コルメツラに於いては健康性は農場全体だけの問題には留まらない。むしろその内部における建築物についても、それが「健康的な領域 (*saluber regio*)」、すなわち身体の病気を引き起こす「汚れた空気 (*aer corruptus*)」が取り除かれている場所に備え付けられていることで、最も健康的な場所にするよう勧める。<sup>63)</sup>

#### 4.2. 「健康的な領域」の三要因

その健康的な領域について、コルメツラは3つの水準から記述を行っている。第一に気候であり、第二に水であり、最後に風である。

気候について論じる際、コルメツラはまず2つのネガティブな事例を取り上げる。テーバイは夏には比較的過ごしやすいが、一方冬には寒冷となり、反対にカルキスは冬こそ穏やかだが夏には過酷となる。もっとも望ましいのはその中間の気候であり、それは丘の中腹であるというのがコルメツラの理解である。<sup>64)</sup>

水の健康性に関する議論は、先の2つの『農業論』にはあまり見られなかった点のひとつである。水そのものの重要性についてはコルメツラ自身が5章に先立って次のように強調している。

水の好ましさについてはこの点が明らかであって、多くを語る必要もあるまい。それ無しでは健康にであれ不健康にであれ、我々が生きながらえることのできぬものが、もっとも高く評価されることを疑う者があるだろうか (*Ibid.*, 1.3.4-5)<sup>65)</sup>。

もちろん、農地内に泉や井戸が存在することが最も望ましいが、そうでない場合には雨水をためる貯水槽を、家畜用と人間用とに分けて用意することもできる。あるいは、山の水や丘の傾斜地に作った井戸なども、人間の利用に耐える。

その一方、最悪であるとされているのは沼地でゆっくりと流れている水であり、さらに沼で滞留している水は「病的 (*pestilens*)」で害を持つと見なされる。ただし、こうした水でさえ冬季には豪雨によって洗い流されることによってその害が緩和されることから、雨水がもっとも健康的であり、汚染された自ら毒性を洗い流すことが示される。<sup>66)</sup>

議論が川に移ると同時に、コルメッラは大気健康性へと話題を転換させる。ウァッローと同じく、川とそこから吹いてくる風は、人間にとって不健全なものであると見なされる。

しかしもし川が高所から遠く離れていて、土地の健康性や土手の高さがウィッラを流れよりも高い場所に作ることを許す場合にも、その川に向き合う形ではなく背にするように、そして建物の正面がその地域において害のある風向きとは反対向き、もっとも友好的な風向きの方向を向いているように心がけるべきである。というのも、大抵の川は夏には暑く冬には冷たい蒸気を発散し、別の風がそこに吹いてきて追い出されない限り、家畜にも人間にも疫病をもたらずから (*Ibid.*, 1.5.4)<sup>67)</sup>。

コルメッラが想定している大気健康性は、先の気候論と同様に、基本的には寒暖の問題に回収される。ここで注意したいのは、川についての議論が

「土地の健康性」を前提として行われている点である。コルメツラが議論しているのは、ある土地の中にある建築物の配置と方角であり、土地そのものの健康性ではない。同様に、方位に関してもコルメツラは先の2つの農業論とはやや異なる仕方提言を行う。

先述したように、ウィツラは健康な場所においては東か南を向いていることが一番良く、不健康な場所に置いては北を向いていることが一番良い (*Ibid.*, 1.5.5)<sup>68)</sup>。

コルメツラにとっては、ウィツラが受ける風の方角そのものは「土地の健康性」を構成しない。むしろ自然的要因によって土地が健康か不健康かが決定され、それを前提とした上で建築物の方角を定めるとというのがコルメツラの論じるところである。

その後、コルメツラの議論はウァッローにも見られた沼地の問題に移行する。

建物の近くに沼地や軍用道路<sup>69)</sup>があるのも望ましくない。前者は暑くなると害のある悪臭を放ち、また悩ましい針を持って大群でわれわれに襲い掛かる生き物を生む。また、冬の湿気を奪われ、泥や腐敗した汚物によって汚染された、泳ぐものや這いずるものによる疫病をもたらす。この疫病によってしばしば謎の病気が引き起こされ、その原因は医者でさえ分からないものなのである (*Ibid.*, 1.5.6)<sup>70)</sup>。

ここでもまた、コルメツラが想定しているのは「建物 (*aedificium*)」とその設置場所である。注意すべきは、コルメツラが病の原因とみなしている存在は、「悩ましい針」をもって人間を苦しめる生き物ではないということである。彼が沼と結びつけているのはあくまで「泳ぐものや這いずる者の疫病 (*nantium serpentiumque pestes*)」であって、ウァッローの「ある種の小さな

生き物」とは別個の存在であると理解するべきであろう。<sup>71)</sup> いずれにせよ、沼が病気と結びつけられていること、そしてそれ故に人が住む空間は沼に近接することを避けるべきであるということ、これ自体は明白である。

コルメッラの『農業論』における健康性に関する議論は、既に与えられた土地において——それが健全か否かによって対応は異なるが——どのように建築物を配置するか、に終始する。「健康的な場所」は手に入れることが望ましいとはされるが、その獲得自体は運にも依存するものであり、またその条件や性質などについては直接的かつ詳細に論じられない。その代わり、農業に携わる者が必要とすべき知識としては構造物の方に主眼が置かれているのである。

このことはウェッローを検討することで示された、学知による自然の改善あるいは克服というテーマに呼応する。先に挙げたアティリウス・レグルスによる警句に続けて、コルメッラは次のように言う。

しかるに、場所を問わずに買ってしまったり、有益さの魅惑や美しさの魅力に惑わされたりといった事が無いのが賢明であるのは確かであるが、購入したり相続したりした土地を肥沃で有益なものとする家父長もまた、真実勤勉なのである。というのも、我々の先駆者たちは不健全な気候に関する、病的な液体を和らげるための多くの処方箋を伝えているのであり、また狭い土地においても農耕者は知恵や勤勉とによって土壤の不毛さを乗り越えることができるからである (*Ibid.*,1.4.3)<sup>72)</sup>。

良い土地を選択することが賢明さ (*sapiens*) であることはコルメッラも認めるところであるが、病的な気候 (*gravius caelum*) あるいは土壤の不毛 (*macia soli*) を克服することもまた、知恵 (*prudencia*) あるいは勤勉 (*diligentia*) の現れと言うことになる。このことは更に、コルメッラによる『農業論』全体の意義付けとも連関する。同時代人が農業経営の不振の原因を気候や土壤といった自然的要因に求めていることを批判して、コルメッラ

は知恵や勤勉、また経験によってこそ、農業という営みは偶然や神頼みに依存せずに行うことができるのだと主張する。<sup>73)</sup>彼の環境についての記述はそれゆえに、人間の手が介入しうるもの、つまり建築を中心として展開されるのである。

上の検討は、ウァッローとコルメッラの差異を明らかにしようとしたものではない。知による偶然性の排除についても、あるいは環境のなかでどうやりくりしていくかについても、先に取り上げた部分で既に示されていたことである。むしろ明確になったのは、少なくともウァッロー以降の『農業論』が、環境と身体の関係について意識しながら、それに対処する方法に関心を寄せ、そして建築物の配置などによる環境の回避あるいは改善という回答を与えていたことである。ウァッローよりも詳細なコルメッラの記述は、内容の豊富さと同時に、そうした点もよりはっきりと描いていると言えるだろう。

## 5. おわりに

本稿では古代ローマの3つの農事書における「健康」に関する言説を検討し、その特徴を見極めようと試みた。その特徴は3つにまとめることができる。第一に、基本的に健康に影響を与えるものとして想定されているのが「大気」であるということである。ウァッローに於いては更に「小さな生き物」、コルメッラに於いては「水」という要素が加わるものの、中心的に想定されているものは方位や近隣の地勢、たとえば川、海、沼などによって変化する自然的要素である。この点だけを取り出してみれば、確かにローマの農事書もまたヒポクラテースの名を冠する医学の流れを汲んだものとして理解されるかもしれない。しかし続く2つの要素は、所謂「医学」とは別の問題関心に基づくものであると考えることができる。

1つは、大気の性質が「健康的／非健康的」の単純な対立に留まっている点である。『空気、水、場所について』に健康性もその他の著作に於いても、

医学的テキストに健康性重要視されているのは、ある性質を持った空気がどのような体質、病気をもたらすかである。あるいは東風が最も健康的で西風がその反対である、という理解は「良い／悪い空気」と単純化できるかもしれないが、むしろ注目すべきは、風の性質と人間の体質、症状が細々と論じられ、結びつけられている点であろう。そうした記述の目的は読者に適切な診断と治療を教授するためだと考えられる。諸農事書はそうした記述をおこなわない。著者らは端的に、特定の方位を勧め、沼地を不健全なものとし、またある種の水の優越関係について述べ立てるものの、いかなる地勢がいかなる病気を引き起こすかについては言及しない。特定の病気とそれに対する対処法についても論じるが、それは環境についての議論とは別個に行われるものである。その点で彼らの環境論は、医学で行われているものと方向性を違えていると言えるだろう。

もう1つの差異は、ウェアッローやコルメッラが診断や治療法ではなく対策を提示する点である。自然環境が基本的には所与のものであるという理解は医学においても農事書においても同様であるが、しかし農事書においては、その環境を人間の知識によって回避する、場合によっては害を低減するという必要性和手段が記述されるのである。

その理由は端的には、農事書の目的がよき農業に向けられているから、というごく単純な点に求めることができるかもしれない。医学が患者の治療を目的とするのとは対照的に、あくまで農耕が主眼となっている農事書が詳述すべきなのが、環境の影響そのものではなく環境への対策であるのは当然である。それゆえ、これらの特徴が「ローマ的」な知識のありようと「ギリシア的」あるいは「ヘレニズム的」なそれとの差異を示すものだと考えるのは、先述したとおり早計であるように思われる。<sup>74)</sup>

本稿が示そうとしたのは、医学とは別の分野で環境と健康の関係がどのように記述されているかであった。冒頭で述べたように、特にウェアッローの「小さな生き物」に関して、その見解がヒポクラテース的伝統とは食い違っているといた主張がなされている。それと同時に、良い農業を目指す

農学と、患者の治療に主眼が置かれた医学との間にあるテーマの違いから現れる問題意識と記述対象の違いも、注目すべき点ではないかと考えられる。そしてそのスタイルは、理論的な水準ではやや見解を違えるウァッローとコルメツラに健康性も、共通した形で現れてくるものなのである

今後の課題として、ローマの他の学問的テキストの関連性について触れておきたい。本稿で農事書に関して確認した環境論は、農事書というジャンルそのものに限定されるものではない。たとえば、ウィトルーウィウスの『建築書』もまた、土地の選定と風を制御することによる都市環境の整備を論じている。

もう1つの課題として、公衆衛生に関する議論についても若干述べておく。本稿で論じたように、ローマの一部の知識人が環境の健康に対する影響について思索を行っていたことは間違いないが、それが Scarborough が主張するようにローマのインフラストラクチャーなり制度の背景にあったかどうかについては、議論の余地があると筆者は考える。農地と都市とでは以下2つの大きな違いがあるからだ。第一に、農地に置いている自然条件が基本的な健康性を規定するのに対して、都市に置いている人工的なもの、例えば開渠のようなものが健康性に影響を与えられている点。第二に、農地経営が家父長とその家族の健康という私的な問題になるのに対して、都市の環境整備は市民の健康に関する問題になるであろうという点である。家族の健康に対して家父長が配慮するのと同じように、都市の統治者が市民の健康に配慮していたという事ができるのだろうか。こうした問題を今後の課題としつつ、本論を終える。

[注]

- 1) 本稿で用いる史料の略号は Hornblower, S. and Spawforth, A.(eds.) *Oxford Classical Dictionary*, 4<sup>ed.</sup>, Oxford University Press, 2005 に依拠する。
- 2) 現存しないものも含めた農事書というジャンル全体については、Martin, R., *Recherches sur les Agronomes Latins et leur Conceptions Économiques et Sociales*, Les

Belles Lettres, 1971 を参照。本邦の研究では、村川堅太郎、「羅馬大土地所有制」、『村川堅太郎古代史論集 III』、岩波書店、1987 年が、『農業論』や小ブリニウスなどの農業史の史料について、先行研究の整理と考察を行っている。

- 3) こうした研究の最も古典的なものとして Mommsen による解釈を挙げることができる。彼の研究において農事書は、当時の土地所有の様態を明らかにするとされると同時に、ローマの富裕者たちの利潤への志向を示すものとされる(モムゼン、Th.、長谷川博隆訳、『ローマの歴史 II』、名古屋大学出版会、2005 年、305-317 頁)。このような解釈は Rostovtzeff の研究においても同様であり、『農業論』は前二世紀以降進化した、収益を増大させようとする富裕者による、「科学的・資本主義的農業」の手引き書であったと見なされる(ロストフツェフ、M.、『ローマ帝国社会経済史』上下、坂口明訳、東洋経済新報社、2001 年)。他方 Finley は、例としてカトーの『農業論』第 1 章 7 節における不条理性を指摘し、古代の農業論に経済学的合理性を読み込むことに警鐘を鳴らしている。(Finley, M. I., *Ancient Economy*, University of California Press, 1973, 95-122)。とはいえ、諸農事書の記述の非科学性、非合理性はある程度認めざるを得ないものの、著作全体が生産量や利益の増大・安定を志向している点については依然確かであろうと思われる。また、農事書を用いて農業の技術面を中心に研究したものに、White, K. D., *Roman Farming*, Cornell University Press, 1970 が挙げられる。
- 4) White, K. D., “Roman agriculture writers I: Varro and his predecessors”, in H. Temporini, (ed.), *Aufstieg und Niedergang der Römischen Welt* i. 4, W. de Gruyter, 439-497, esp. 447-448; White, *op. cit.* White は『農業論』がイタリア(とくにカンパニア)に土地を持つローマの富裕者層のみを対象としていることから、これらをローマの土地所有者や農民の代表と見なすことはできないと指摘する。他方、『農業書』の著者が示す農具や設備に対する投資や、それによる資産増大への情熱に関しては、限定的ではあれ White も認めるところである。
- 5) こうした事態は、ラテン語で執筆された他の医学史上重要なテキスト、すなわちケルスの『医学について』や大ブリニウスの『自然誌』においても同様である。これらもまた医者ならぬ富裕な階層に属する知識人たちによって、百科全書的な全体構成を有する諸々の著作の一部として執筆されたが、後代ならびに現在のローマ医学史ではローマ医学を構成する主要なテキストとみなされる。
- 6) Scarborough, J., *Roman Medicine*, Camelot Press, 1969, 52-58.
- 7) *Villa*. 別荘と農業施設の機能を持つ複合建築物だと定義されるが、本稿で引用されている箇所ではもっぱら人間が居住する建築物が想定されている。
- 8) Scarborough, J., “Roman medicine and public health” in T. Ogawa(ed.), *Public Health: Proceeding of the 5th International Symposium, Comparative History of Medicine-East and West*, 1980, Saikon, 1981, 33-74, 36-38.

- 9) Nutton, V., “The seeds of disease: an explanation of contagion and infection from the Greeks to the Renaissance”, *Medical History*, 1983, 27: 1-24. ガレノスの「病気の種子」概念の歴史的系譜とそのアナロジーの意義を説明する本論文の中で Nutton は、ルクレティウスの「種子」概念の背景に農学的知識がある可能性を巡って、ウァッローとコルメッラを引く。そして Nutton は、農学者とセネカと議論から、ガレノス以前に既に病的な空気の原因を巡る探究が存在していたことを示す。ただし、後述の Phillips の論考にしたがって、ウァッローの概念が混乱しており、ルクレティウスを含む様々の著述家からの引用であるとする。
- 10) Scarborough, op. cit., 35.
- 11) 『ヒポクラテス全集』は、前 5-4 世紀の医者であるヒポクラテスの作と見なされた 60 篇あまりの文書が、前 3 世紀にアレクサンドリアにおいて編纂されたものが基となっている。ただし、ヒポクラテスの真作か否かについては古代以来疑問が投げかけられており、現在の研究では一人の著者によるものとは見なされていない。とはいえ、彼の名を冠するテキスト群が古代において権威あるものとして受け入れられていたことは事実であると考えられる。Nutton, *Ancient Medicine*, Routledge, 2013, 53-71.
- 12) Jarcho, S., “Medical and nonmedical comments on Cato and Varro, with historical observation on concept of infection”, *Trans. Stud. Coll. Physns Philadelphina*, 1975-76, 43: 372-377, Borca, F., “Town and marshes in the ancient world”, in V. M. Hope and E. Marshall (eds.), *Death and Disease in the Ancient City*, Routledge, 74-84.
- 13) 上記 Jarcho の研究は、大カトーとウァッロー兩名の農事書を検討し、とくに後者に関しては「小さな生き物」の特殊性を論じてはいるものの、コルメッラを含めた農事書というジャンルそのものには話が及んでいない。なお、諸注釈者は各農事書の土地に関する記述をマラリアを示唆するものとし、イタリアという土地と関連づけて解釈するが (Goujar, R., *Caton: De l'agriculture*, Les Belle Lettres, 1975, 124; Heurgon, J., *Varron : Économie rurale I*, Les Belle Lettres, 1978, 134)、後述の通り同様の記述はギリシアの医学書などでも確認できるため、この点に関してはより詳細な検討が必要である。
- 14) 以下、『ヒポクラテス全集』の著作名および本文の翻訳は、大槻真一郎他、『ヒポクラテス全集』、エンタプライズ、1985年に依る。
- 15) ここでは沼の悪臭と病気は直接的には結びつけられていないが、沼による大気汚染については『体液について』で論じられている。「気候の悪いところにある地方には、その季節に応じた病気がおこる。たとえば、一日の間断が不規則だと、その場合にはその地方の病気は秋季におこるものである。ほかの気候の場合もそれに従う。泥とか湿地の臭気から生ずる病気もある」(Hipp., *De Hum.* 12)。また、ミアズマによる大気汚染については『体内風気について』に記述がある (Hipp.,

- De Flat.* 6)。
- 16) Nutton, V., “Medical thought on urban pollution”, in Hope and Marshall (eds.), *op. cit.*, 65-73.
  - 17) Cic., *De Sen.*, 10; Plin., *HN.*, 29.15. 大カトーの経歴については、Astin, A. E., *Cato the Censor*, Oxford University Press, 1978.。
  - 18) Cic., *De Sen.*, 10; Nepos, *Cato* 1.4.
  - 19) Livy, 32.7.13 ; Nepos, *Cato* 1.3.
  - 20) Plut., *Cato Mai.*, 16-19.
  - 21) コルメッラも大カトーをローマにおける農学の出発点とみなす (Columella, *Rust.*, 1.1.12)。
  - 22) Cato, *De Agr.*, 2. ただしカトーが長命であることもあって、これも明確に年代を特定できるものではない。もうひとつのあり得そうな推定として、カトーが70歳になるまでウィッラに石膏を用いなかったという大プリニウスの記述と、カトー自身の石膏張りについての記述 (*ibid.*, 128) から、執筆年代を後164年以降とするものもある。Cf. Astin., *op. cit.*, 190-191.
  - 23) Brehaut は該当の箇所がギリシアの文献や南イタリアのギリシア植民市での実践を借用したものであるとする (*op. cit.*, xxi.) が、明確な引用元などは明らかではない。ただし、症状などの名称がギリシア語からの翻訳である点等、ギリシア語文献の影響は明らかであると思われる。Cf. Nutton, *op. cit.*, 165.
  - 24) Cato, *De Agr.*, 127.
  - 25) *Ibid.*, 159.
  - 26) *Ibid.*, 160.
  - 27) *Ibid.*, 156-7.
  - 28) ここでの「よい気候 (*bonum caelum*)」は嵐 (*calamitosus*) がいないこと。
  - 29) Si poteris, sub radice montis siet, in meridiem spectet, loco salubri, operariorum copia siet, bonumque aquarium, oppidum ualidum prope siet [si] aut mare aut amnis qua naues ambulant, aut uia bona clebrisque. 大カトーからの引用は Goujar による Budé版に依る。
  - 30) 邦訳は、牛田徳子訳、『政治学』、京都大学学術出版会、2001年、373頁より引用。
  - 31) Scarborough, *op. cit.*, 52-56.
  - 32) Columella, *Rust.*, 1.1.12; Plin., *HN.*, 17.199.
  - 33) Rawson, *op. cit.*, 135.
  - 34) Phillips はウェアッローの「小さな生き物」が後代に無視されたこと、また彼自身の沼に関する瘴気説的解釈と矛盾することを指摘したうえで、「小さな生き物」がルクレティウス『自然の本性について』から影響を受けたものであると主張する。Phillips, J. H., “On Varro’s animalia quaedam minuta and etiology of disease”, *Trans.*

*Stud. Coll. Physns Philadelphia*, 1982, Ser. V.4: 12-25.

- 35) Varro, *Rust.*, 1.1.1; White, *op. cit.*, 22.
- 36) Cf. Ovid., *Fasti.*, 1.660
- 37) スクローファはウァッローの同時代人で、彼もまた農学書を執筆したと目される。コルメツラによれば「トレメリウス・スクローファは（農学に）雄弁を与え、マルクス・テレンティウス（・ウァッロー）は磨き上げ……」（Columella, *Rust.*, 1.1.12）。
- 38) Varro, *Rust.*, 1.2-1.3.
- 39) *Vtilissimus autem is ager qui salubrior est quam alii, quod ibi fructus certus; contra [quod] in pestilenti calamitas, quamuis in feraci agro, colonum ad fructus peruenire non patitur. Etenim ubi ratio cum Orco habetur, ibi non modo fructus est incertus, sed etiam colentium uita. Quare ubi salubritas non est, cultura non aliud est atque alea domini uitae ac rei familiaris.* ウァッローからの引用はHeurgonによるBudé版に依る。
- 40) *Nec haec non deminuitur scientia. Ita enim salubritas, quae ducitur a caelo ac terra, non est in nostra potestate, sed in naturae, ut tamen multum sit in nobis, quo, grauiora quae sunt, ea diligentia leuiora facere possumus. Etenim si propter terram aut aquam odore quem aliquo loco eructat, pestilentior est fundus, aut propter caeli regionem ager calidior fit, aut uentus non bonus flet, haec uitia emendari solent domini scientia ac sumptu, quod permagni interest, ubi sint positae uillae, quantae sint, quo spectent porticibus, ostiis ac fenestris.*
- 41) *An non ille Hippocatares medicus in magna pestilentia non unum agrum, sed multa oppida scientia seruauit? Sed quid ego illum uoco ad testimonium? Non hic Varro noster, cum Corcyrae esset exercitus ac classis et omnes domus repletae essent aegrotis ac funeribus, immisso fenestris nouis aquilone et obstructis pestilentibus ianuaque permutata ceteraque eius generis diligentia suos comites ac familiam incolumes reduxit?* コルキュラでの出来事は、前67年のポンペイウスの海賊討伐に参加した際のものであると考えられている（Heurgon, *op. cit.*, 121）。
- 42) ソラノスによる伝記には、ヒッポクラテースがイリュリアやパイオニアから報告された風向きからアッティカも疫病に見舞われると予測し、各都市や弟子に指示を与えたとする逸話があり、同様の記述が大プリニウスにも見られるが（*Plin. HN.*, 7.123）、上の引用にあるような「知」による疫病への措置は記録にない。その点では、「知」は対策方法に関する狭義の知識だけではなく、予知なども含めたものだと解釈する事ができるかもしれない。
- 43) 様々な設備の構造や配置によって風向きを制御し、健康性を維持するという方法については、ウァッローよりやや時代を下ってウィトルーウィウスの『建築書（*De Architectura*）』にも何うことができる。『建築書』の第一巻では公共建築物につ

いて論じられるが、その第一の主題である城市 (*moenia*) の健康性は、土地の選定 (Vitr., *De Arch.*, 1.4.10) と内部の建築物の配置 (*ibid.*, 1.6.1) から検討され、後者においては「街路から風が除かれ」ていることが重視される。同様に、劇場の健康性 (*ibid.*, 5.3.2) もまた大気、正確にはそれに影響を与える日光の観点から論じられていることにも注目しておきたい。

- 44) このような知識の活用法を、Scarborough は医学の「ヘレニズム的パターンではない」とする。すなわち、医者が専門知を要求される世界＝ヘレニズム的医学と、ウァッローの如く医学を家父長 (*pater familias*) の伝統に結び付け、その知識を様々な実践に応用しようとする試みの対置である (Scarborough, *op. cit.*, 58)。ただし、「医学的」な知、とりわけ環境に関する知と非-医学的実践との結び付けに関しては、先述したアリストテレスの例があり、必ずしもローマに固有なものではないことに注意したい。
- 45) *Auertendum etiam, siqua erunt loca palustria, et propter easdem causas, et quod [arescunt] crescent animalia quaedam minuta, quae non possunt oculi consequi, et per aera intus in corpus per os ac nares perueniunt atque efficient difficilis morbos. Fundanius: Quid potero, inquit, facere, si istius modi mi fundus hereditati obuenerit, quo minus pestilential noceat? Istuc uel ego possum repondere, inquit Agrius: vendas, quod assibus possis, aut si nequeas, relinquis.* 本章に関する研究史の簡潔なまとめとして、Jarcho, *op. cit.*, 372-378。
- 46) 註8で示したものの他に、Hipp., *De Reg.*, 2.37-8, 48, *De Aff. Int.*, 45.2。
- 47) Vitr., *De Arch.*, 1.4.10-11.
- 48) Strabo, 5.1.7.
- 49) 近年の沼地に関する概括的な研究としては Borca, *op. cit.*。
- 50) 先述のとおり Jarcho は、当該箇所が先行研究で取り上げられていないことを指摘している (Jarcho, *op. cit.*, 375)。Borca は第2節の最後の掛け合いからウァッローにおける沼を「克服できないもの」と解釈するが (Borca, *op. cit.*, 75)、本対話編におけるアグリウスとスクローファの役割を踏まえた場合、むしろ重要なのは後者の主張であると考えられるだろう。ただしその場合でも「克服」とはやや文脈が異なるとは言わざるを得ない。
- 51) *At Scrofa, Vitandum, inquit, ne in eam partem spectet villa, e quibus uentus gravior afflare soleat, neue in conualli caua et ut potius in sablimi loco aedifices, qui quod perflatur, siquid est quod aduersarium inferatur, facilius discutitur, Praeterea quod a sole toto die illustratur, salubrior set, quod et bestiolae, siquae prope nascuntur et inferuntur, aut efflantur aut aritudine cito pereunt.*
- 52) Jarcho, *op. cit.*, 376.
- 53) Nutton, *op. cit.*, 2.

- 54) Hipp., *De Aer.*, 7.
- 55) Hipp., *Epid.*, 3, 15-16.
- 56) Columella, *Rust.*, 8.16.9.
- 57) *Ibid.*, 1. Praef. 15.
- 58) Columella., *Rust.*, 1.1.14 (ケルスス), 3.3.3 (セネカ)。
- 59) この年代はプリニウスがコルメッラの著作の内容を論じているからも補強される。Plin. *HN.*, 17.162ff.
- 60) Quod si uoto fortuna subscribit, agrum haberimus salubri caelo, uberi glaeba, parte campestri parte alia collibus uel ad orientem uel ad meridiem molliter deuexis. コルメッラの引用は Rodgers, R. H., *Res Rustica*, Oxford University Press, 2010 を用いた。
- 61) Porcius quidem Cato censebat inspiciendo agro praecipue duo esse considerata, salubritatem caeli ubertatem loci; quorum si alterum dasset ac nihilo minus quis uellet incolare mente esse captum atque eum ad agnatos et gentiles deducendum. 2.Neminem enim sanum debere facere sumptus inculutura sterilis soli, nec rursus pestilenti quamuis feracissimo pinguique agro dominum ad fructus peruenire. Nam ubi sit cum Orco ratio ponenda, sed et uitam colonorum esse dubiam uel potius mortem quaestu certiore.
- 62) In uniuersum tamen quasi testificandum atque saepius praedicandum habeo, quod primo iam Punico bello dux inclitissimus M. Atilius Regulus dixisse memoratur: fundum sicuti ne fecundissimi quidem soli, cum sit insalubris, ita nec efetti, si uel saluiberrimus sit, paradndum; また殆ど同一の内容で大プリニウスもレグルスの言葉を用いている (Plin., *HN.*, 18.27)。
- 63) *Ibid.*, 1.4.9.
- 64) *Ibid.*, 1.4.9-10.
- 65) De bonitate aquae ita omnibus clarum est, ut pluribus non sit disserendum. Quis enim dubitet eam maxime probatam haberi, sine qua nemo nostrum uel prosperae uel aduersae ualetudinis uitam prorogat?
- 66) このような水の分類、その健康性の序列づけに関してはコルメッラの独創ではない。雨水の健康性についてはヒポクラテースの『空気、水、場所について』が詳しく、また大プリニウスはこうした学説史について批判的に論述している (Plin. *HN.* 31.21)。ウィトルーウィウスも水と水道の健康性について論じており、更に沼地に関しては同じく害を和らげられる可能性について記述しているが、そこで沼地の水を洗い流すものとされているのは、雨水ではなく海水、その塩分によるある種の殺菌効果である。これに似た記述として、ストラボン『地理誌』のアクイレアの記事を参照。さらに、水の用途別使用に関しては、アリストテレス『政治学』あるいはフロンティヌス『ローマの水について』なども取り上げており、人

間用の水とそれ以外とを弁別することは、当然ながらごく一般的な実践であったと推察できる。

- 67) Sin summotus longius a collibus erit amnis, et loci salubritas editiorque situs ripae permittet superponere uillam profluenti, cauendum tamen erit, ut a tergo potius quam prae se flumen habeat, et ut aedificii frons auersa sit ab infestis eius regionis uentis, et amicissimis aduersa; cum plerique amnes aestate uaporantis, hieme frigidis nebulis caligent. Quae, nisi ui maiore inspirantium uentorum submouentur, pecudibus hominibusque conferunt pestem.
- 68) Optime autem salubribus, ut dixi, locis ad orientem uel ad meridiem, grauius ad septentrionem uilla conuertitur.
- 69) 道路が望ましくないのは健康性の問題ではなく、人通りの多さに由来する盗賊行為などが理由である。この点に関しては大カトーとコルメッラは正反対の主張を行っているが、そうした差異の原因を Scarborough は時代の変化に伴う道路に対する認識の相違に求める (Scarborough, op. cit., note 33)。
- 70) Nec paludem quidem uicinam esse oportet aedificiis nec junctam militarem uiam, quod illa caloribus noxium uirus eructat et infestis aculeis armata gignit animalia, quae in nos densissimis examinibus inuolant, tum etiam nantium serpentiumque pestes hiberna destitutas uligine, caeno et fermentata colluue uenenatas emittit, ex quibus saepe contrahuntur caeca morbi, quorum causas ne medici quidem perspicere queunt;
- 71) Phillips, op. cit., note 18.
- 72) Quapropter cum sit sapientis non ubique emere nec aut ubertatis inlecebris aut deliciarum concinnitate decipi, sic uere undustrii patris familiae est quicquid aut emerit aut acceperit facere fructusum atque utile, quoniam et grauioris caeli multa remedia priores tradiderunt quibus mitigetur pestifera lues, et in exili terra cultoris prudential ac diligentia maciem soli uincere potest.
- 73) *Ibid.*, 1. Praef. 1-3.
- 74) コルメッラと同時代のローマの知識人であるケルススの場合、その『医学について』において上で検討したような議論をごく僅かな例を除けば殆ど欠いており、もっぱら養生法と治療に特化した内容での執筆を行っている。註 37 で触れたように、ケルスス自身も『農業論』を執筆した可能性が高いことを踏まえれば、彼は知識や思想においてコルメッラと立場を異にしていたと言うよりも、そうした内容が『医学について』には相応しくないと判断したと考えるほうが妥当であろう。

## [主要参考文献]

- Astin, A. E., *Cato the Censor*, Oxford University Press, 1978.
- Borca, F., “Town and marshes in the ancient world”, in V. M. Hope and E. Marshall (eds.) *Death and Disease in the Ancient City*, Routledge, 2001, 74-84.
- Finley, M. I., *Ancient Economy*, University of California Press, 1973.
- Goujar, R., *Caton: De l'agriculture*, Les Belles Lettres, 1975.
- Heurgon, J., *Varron : Économie rurale I*, Les Belles Lettres, 1978.
- Jarcho, S., “Medical and nonmedical comments on Cato and Varro, with historical observation on concept of infection”, *Trans. Stud. Coll. Physns Philadelphia*, 43(1975-76): 372-378.
- Martin, R., *Recherches sur les Agronomes Latins et leur Conceptions Économiques et Sociales*, Les Belles Lettres, 1971.
- Morley, N., “The salubriousness of the Roman city”, in H. King (ed.), *Health in Antiquity*, Routledge, 2005.
- Nutton, V., “The seeds of disease: an explanation of contagion and infection from the Greeks to the Renaissance”, *Medical History*, 27(1983):1-24.
- “Medical thought on urban pollution” in Hope and Marshall (eds.)(2000), 65-73.
- Ancient Medicine*, 2<sup>nd</sup> ed., Routledge, 2013.
- Phillips, J. H., “On Varro’s *animalia quaedam minuta* and etiology of disease”, *Trans. Stud. Coll. Physns Philadelphia*, 1982, Ser. V.4: 12-25
- Rawson, E., *Intellectual Life in the Late Roman Republic*, Duckworth, 2002.
- Rodgers, R. H., *Res Rustica*, Oxford University Press, 2010.
- Scarborough, J., *Roman Medicine*, Camelot Press, 1969.
- “Roman medicine and public health” in T. Ogawa(ed.), *Public Health: Proceeding of the 5th International Symposium, Comparative History of Medicine-East and West*, 1980, Saikon, 1981, 33-74.
- White, K. D., *Roman Farming*, Cornell University Press, 1970.
- “Roman agriculture writers I: Varro and his predecessors”, in H. Temporini, (ed.), *Aufstieg und Niedergang der Römischen Welt* i. 4, W. de Gruyter, 1973, 439-497.
- モムゼン、Th.、長谷川博隆訳、『ローマの歴史II』、名古屋大学出版会、2005年。
- ロストフツェフ、M.、『ローマ帝国社会経済史』上下、坂口明訳、東洋経済新報社、2001年
- 村川堅太郎、「羅馬大土地所有制」、『村川堅太郎古代史論集 III』、岩波書店、1987年。

## SUMMARY

## Concept of the “Healthful Place” in the Agricultural Books of Ancient Rome

Ryosuke TSUTSUMI

The agricultural books of ancient Rome, written by Cato the Elder, Varro, and Columella, contain descriptions of Roman traditional medicine, pharmacy, and veterinary medicine. In this study, the author remarks on the etiology of diseases and farming locations based on the medical knowledge described in these books, presents these characteristics, and compares them with more specialized medical texts by physicians.

Cato the Elder, the earliest agronomist of Rome, while discussing farm purchase, advises to choose “a healthful place”, in a way similar to Aristotle’s arguments about the location of a city. A century later, Varro discusses this issue more sophisticatedly. He distinguishes healthfulness from the profitability of the land and explains the importance of these factors. According to Varro, the healthfulness of a place is determined by air and water; in pestilential places, such as marshy lands, farmers cannot survive, and farming is risky. A more important point of Varro’s environment theory is the role of science and its relation to nature. He argues that although the healthfulness of the place is depended on natural elements, human knowledge and diligence can alleviate the natural injury. In the imperial period, Columella also discusses the importance of human effort in maintaining the health of the environment. He rejects excess dependence on luck in farming and proposes that natural problems can be remedied by the farmer’s effort and planning.

These environmental theories and the understanding of nature and science have varied across medical traditions. First, in the agricultural books, climate is simplified into either good or bad binary categories; hence complicated effects of the climate on the human body are not emphasized enough. Second, Roman agronomists, at least Varro and Columella, specify not only which places are healthful but also how to cope with pestilential places; such concerns about environmental problems are hardly present in the ancient medical treatises such as the Hippocratic Corpus. In the Roman agricultural books, we can find a kind of theory and interest on “healthful places” different from those in the medical ones.